

架け橋目指す「現代の遣唐使」

こぼれ話

文
&
写真

中央大学大学院総合政策研究科博士後期課程
NPO 法人東京自由大学運営委員長
辻 信行

昨年暮れ、「日中青年友好交流訪中団」の一員として、福建省・武夷山を訪れた。前号には書ききれなかった、そのときの印象的なエピソードを紹介したい。

武夷山の茶

武夷山の茶は、明代から中国茶の最高級品として知られるようになり、はるか遠く北京の皇帝まで献上された。いまでも政府関係者に買い占められる「大紅袍」という品種には、とくにその名称の由来を巡って、次のような伝説が伝えられている。



大紅袍の母樹

「あるとき皇帝が武夷山を通りがかって病気になり、近くにいた僧侶がこの茶を飲ませたところ、たちまち回復した。そこで皇帝は、僧侶としての最高位を示す紅の衣を贈って感謝した」

またこんな話もある。「武夷山の高

僧が病気になったが、ここの茶を飲んでいううちに治ったので、自分の紅の衣をこの木にかけて感謝した」

ゲテモノ食い

読者の方は、次の言葉に聞き覚えがあるはずだ。

「中国人は4つ足は机以外、空飛ぶものは飛行機以外、なんでも食べる」。これは真実を言い表していると思う。筆者は武夷山で過ごした夜、スッポン・ウサギ・カエル・シカ・アヒルを食したが、訪中団のメンバーには、ラクダ・ヤク・ハト・ロバ・カイコのサナギを食らったことのある玄人もいた。

ちなみに東京・新宿の上海小吃という中華料理店では、サソリ・ウシのペニス・ヘビ・スズメ・ブタの脳みそなどを食べることができる。

先日、中央大学の大学院生5人を「ちょっとみんなで食事しよう！」とダマして連れて行った。メニューを開くなりゲテモノ写真が現れる。

するとお葬式のように暗くなる人と、なぜかハイテンションで喜び出す人の2つに分かれた。

しかし実際、ゲテモノは見た目が見えただけで、実はこの上なく美味しいのだ。徐々に全員がそのことに気付いていき、みんな奪い合うようにブタの脳みそを箸で突つき始めた。食感は豆腐のようになめらかで、味わいはマダラの白子のようにクリーミー。女子たちは「お肌に良さそう！」とうれしそうだ。

これを読まれているあなたも、ダマされたと思って、ぜひ食べに行っていたきたい。



ブタの脳みそ

